

2026.04.26.

## 「争いを避ける」

旧約 創世記 13章 1～18節

新約 テモテへの手紙 I 2章 22～26節

### 1. はじめに

4月最後の主の日ですので、旧約から御言葉を受けます。今日は創世記の13章です。前回創世記から御言葉を受けましたのは、2月の最後の主の日でした。3月は棕櫚の主日でしたので、イエス様のエルサレム入城の場面から御言葉を受けました。間が空きましたので創世記を少し振り返っておきましょう。創世記の12章の始めの所で、アブラムは神様から召命を受け、祝福の約束を与えられます。ここからアブラハムの話が始まります。その召命と祝福の約束が有名な「**あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。 12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。 12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。**」という言葉でした。この神様の言葉は、アブラハムの生涯だけではなく、その子イサク、更にその子どものヤコブへと受け継がれ、そしてその12人の息子が祖先となるイスラエル民族、更には私共にまで、全ての神の民に受け継がれることとなります。私共はアブラハムの子孫として、アブラハムと同じように神様に示された地に向かって旅を続け、全ての人に神様の祝福を伝え、神様の祝福へと招いていく、そのような使命を与えられている者として、この地上での歩みを続けているわけです。

この旅に出たときアブラムは75歳、妻のサライは65歳でした。彼らには子どもはおりませんでしたけれど甥のロトが一緒でした。彼らはハラシ（聖書の巻末の地図1を見れば分かりますが、ユーフラテス川の上流の方にあります現在のトルコ共和国の南東部に位置します）を出て、500 km以上南にくだったカナン地方（現在のイスラエル国）に来ました。彼はシケムに祭壇を築き、更に南のネゲブ地方にまで行きました。そこで飢饉に遭い、彼らはエジプトに行きます。そして、再びネゲブ地方（有名な死海の東から南にかけての地方）に戻ってきた時のことが記されているのが、今朝与えられている御言葉の場面です。

### 2. 財産が多すぎた

2節を見ますと、この時「**アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた**」と記されています。そして6節を見ますと「**その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかった**」とあります。彼らは遊牧民でしたから、彼

らの財産の主なものは羊や牛といった家畜です。それが多くなりすぎて、アブラムとロトとは一緒に住むことが出来なくなってきた。家畜を放牧するためには、それなりの広さの土地が必要です。餌となる草が生えていて、水も与えなければなりません。彼らの財産は、その土地が養うことの出来る家畜の数を超えてしまったということです。いつの時代でも、誰でも自分の財産が増えることは良いことであり、嬉しいことでしょう。現代ならば、お金はいくらあっても困ることはないのかもしれませんが、アブラムの時代その土地で飼える家畜の数には自ずから限りがありました。そして、家畜の数が増えすぎた結果、思いもよらないことが起きてしまいました。それが7節に記されている「**アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた**」ということでした。アブラムとロトとは、一緒にハランを出てきた家族同然の身内でした。その使用人達が互いに争う。水場争いだったのか、牧草地を巡っての争いだったのか分かりませんが、これは困ったことです。しかも聖書は「**その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた**」と記しています。アブラムとロトだけがいたわけではなかった。つまり、彼らの使用人達が争っていることを見る者達がいたということです。

ここで幾つかのことを思わされます。第一に、「財産は多ければ良いとは言い切れない」ということです。アブラムとロトの家畜が多すぎるほどに増えなければ、彼らは今までと同じように、一緒に仲良く、家族のように生活できていたわけです。しかし、財産が増えすぎてそれが出来なくなってしまうということが起きた。富というものは、このように争いの火種になり得るということです。このことは、よく弁えておくことが大切です。自分は富を多すぎるほど持っていないので大丈夫、関係ないと思う人もいるでしょうけれど、そんなに単純な話ではありません。富というものには、争いを起こさせるほどの力があるということです。ですから、これを手に入れることに一番の価値を置いてしまうと、人は争いから逃れられなくなってしまうことになってしまいます。どうして戦争がなくなるのか。その原因がここに示されています。現代においても、国家という単位においても同じことが起きることを昨今の国際状況の中で示されているのではないのでしょうか。

第二に、アブラムとロトの使用人達の争いを周りの人達は見ていたわけで、これではアブラムに与えられた周りの人達を祝福するという使命を全うできないことになってしまいます。それは現代の神の民である私共にとっても同じことです。先ほどお読みしました第二テモテ書において使徒パウロが若い伝道者テモテにこう教えました。「**主の僕たる者は争わず、すべての人に柔和に接し、教えることができ、よく忍び、2:25 反抗する者を優しく教え導かねばなりません。**」(第二テモテ2:24.25) こうでなければ、若き伝道者テモテが語る言葉が人々に聞いてもらえない、語る言葉が相手に伝わることはないからです。今年の私共の教会聖句は、週報の表に記されておりますように「**平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。**」(エフェソの信徒への手紙4章3節) ですが、この御言葉に従って、これを全うしていかなければ、

私共はとても神様の祝福の中に人々を招いていくことは出来ないでしょう。よく心に刻んでおかなければなりません。争いのあるところに、平和の神がいるはずありませんし、そんなことは誰にでも分かることです。キリスト者でなくても分かります。そして、私共は見られている。そのことを覚えておかなければなりません。

### 3. アブラムとロトの別れ

さて、この時アブラムはどうしたのでしょうか？ 9 節でアブラムはこのようにロトに言いました。「あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くな、わたしは右に行こう。あなたが右に行くな、わたしは左に行こう。」家族同然のロト達と自分たちは別れて、別々の所で遊牧し、生きていこう。そうアブラムは申し出ました。これは、遊牧民にとって当然の申し出でした。家畜が増え過ぎればそこで放牧を続けることは出来ないのですから、分かれて別々の所に行く。農耕民族でしたらこうはならないでしょう。多分、開墾して田んぼや畑を増やそうとしたかもしれません。アブラムの申し出は、家畜が増えた場合の対応として、少しも特別なことではありません。特別なのは、この時アブラムは甥のロトに行き先の選択権を与えたということです。欲に目がくらめば、当然自分が良い方を取れるようにするでしょう。公平さを求めれば「くじで決めよう」となったかもしれません。しかし、アブラムはそのどちらでもなく、甥のロトに選択権を与えました。

ここで、彼らがいた位置を確認しておきましょう。西には地中海、東にはヨルダン川、それに挟まれた所は山地になっています。この山地は 1000 メートル弱くらいあります。幅は 60 キロメートルくらいです。当然、低地は豊かで、山地は水や草も少なく荒れ野に近い状態です。10 節「ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。」草木で青々としていたのでしょう。そして「ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。」彼らは遊牧民ですから、緑の豊かなところが良いに決まっています。ロトは当然そちらを選んだわけです。ロトがヨルダン川流域へ行くとなった以上、アブラムに残されているのは赤茶けた山地ということになります。アブラムは逆に西の地中海沿いに行けば良かったではないかと思われるかもしれませんが、そちらには既に多くの人々が住んで栄えておりましたから、遊牧民が家畜とともに行くというわけにはいきませんでした。それで、アブラムはあまり人が居ない山地で放牧することにしたわけです。

### 4. 人生の選択

アブラムは自分で選んだわけではありません。しかし、見た目では明らかにヨルダン川流域の方が得です。でも、そちらは甥のロトが選びましたので、そちらに行くことは出来ませんでした。何

とも主体的でないといえますか、自分の人生を切り開いていく覇気を感じないと思われるかもしれませんが。しかもこの時の選択は、これからの人生がかかっているわけです。どうしてアブラムはこの時、自分で選ぶことをしなかったのでしょうか。それは、「アブラムにとってはどちらでも良かった」からだと思います。このように言いますと、「え？」と思われる方もいるでしょう。それは、現代人は「自分の選択で、自分の人生が決まる」と考えているからです。特に、若いとき、人はそのように思い詰めてしまうものです。私も若いとき、受験だとか、就職などで自分の人生が決まってしまうと思込んでいたものです。しかし、全くそうではありませんでした。勿論、今は全くそのようには思いません。右を選べば右の人生があり、左に行けば左の人生がある。どっちが得か、どっちが良いか、そんなものは行かなければ分からない。また、どっちに行っても、時間を巻き戻して分岐点に戻ることは出来ないのだから、あの時こうしていればと考えるだけ無駄なことです。勿論、人生の岐路に立ったときに、どっちでも良いことなのだから、真剣になる必要はないとまではいいません。でも、やや高齢になった私どもは若い人達に「そのように思い詰めることはない。何の問題もない。大丈夫。」と言ってあげたいと思います。アブラムは自分で選択することはせず、残った方を自分の道としました。私には、ここに神の民の選択の秘訣があると思います。

## 5. ただ神様の祝福だけ

それは、アブラムはどっちに行くことになったとしても、「神様が共にいてくださり、神様が祝福してくださる」、このことだけが自分の人生に意味を与え、まことの豊かさを与えるということを知っていたということです。神様を知っている、神様に知られている、神様の召命を受けたということは、自分の将来への見通しや判断で、自分の人生を切り開いていこうとする者ではなくなったということだからです。それ故、アブラムは「信仰の父」と呼ばれるのでしょう。主なる神様はこの時アブラムにこう告げられました。14 節「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。 13:15 見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。 13:16 あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。 13:17 さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」アブラムは目を上げました。彼の目に広がる土地は、神様があなたとあなたの子孫に与えると約束してくださいました。そして、「縦横に歩き回れ」と告げられます。「自由に行け」です。彼は神様から驚くべき祝福の約束をいただきました。アブラムは、こちらを選べば神様がこのようにしてくれるに違いないと考えていたわけではありません。アブラムは何も知りませんでした。しかし、神様はアブラムを祝福されました。私共は、こっちの道を選べばこうなるだろう、あっちの道を選べばあうなるだろう。そんな、予測や見通しを立てて道を選ぶことが多いでしょう。しかし、聖書はここではっきり「あなたの人生は、あなたの見通し通りに行くわけではない。あなたが見えていると思っていることの延長上にあなたの人生があるわけではない」と告げ

ているわけです。そして、「あなたの人生は、私と共にある。あなたの幸いは、私の祝福と共にある」そう告げています。このことを私共はしっかり受け止めたいと思います。

## 6. 神様は私と共に

このことは、自分でヨルダン川流域を選んだロトのその後を見ても分かります。ロトははこちらが豊かそうに見えたので、ヨルダン川流域にくだって行き、ソドムの町に住むこととなります。しかし、この町は14章において戦争に巻き込まれます。この町が豊かだったからでしょう。そして、ロトはその結果、全財産を失い連れ去られてしまいます。アブラムはそれを知り、自分の手下318人を率いてこれを追撃し、ロトとその家族と財産を取り返したのです。更に18章16節以下19章には、ソドムがその罪の故に神様によって滅ぼされてしまうことが記されています。この時、アブラハムは主に執り成しをし、何とかロトの家族だけは助けてもらうことになりましたけれど、「**命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。**」(18:17)と言われたにも関わらず、ロトの妻は逃げるときに後ろを振り返ってしまい塩の柱になってしまったと記されています。とても有名な箇所です。ロトは良い方を選んだはずでしたけれど、結果は良いようにはなりません。彼の選択が間違っていたのでしょうか？そうではないと思います。私共はいつでも自分の見えるところ、理解できるところ、それによって判断し、自分では良いと思えることを判断しているわけです。この時のロトもそのように判断しました。何年後かに自分が住んだ町が戦争に巻き込まれるとか、この町が神様の裁きに会うとか、そんなことをロトが知り得るはずありません。でも、そうってしまったわけです。

ただロトとアブラムを比べてみると、ロトに決定的に欠けているところがあるように思えます。ロトが目の前に広がる豊かなヨルダン川流域を選んだのは当然でした。誰でもそうするでしょう。しかし、なぜロトとその家族はソドムに住むようになったのかということです。聖書に理由は記されておられません。ソドムに住んだということは、遊牧生活を止めたということでしょう。そして、ソドムは神様にその罪の故に滅ぼされるほどに罪に満ちていた、倫理の乱れた町だった。ロトはあえてそこに住むことにしたわけです。理由は分かりません。しかし、豊かさと無関係ではないでしょう。そして、そこに問題があったのではないのでしょうか？富など要らないとは言いません。しかし、そのことが選択の基準になってしまいますと、神様の御前に道を誤ってしまうということなのではないのでしょうか。

## 7. 先のことは分からないけれど

ロトが特別なわけではありません。そして、アブラムが正しいわけでもありません。先のことは誰にも分かりません。それが人間の限界です。そして、その限界を突破するために、占いをすることを聖書は忌み嫌います。はっきり罪だと言います。何故なら、その限界を超えておられるのが神

様であり、その神様を信頼することだけが私共に求められているからです。私共に明日は分かりません。それで良いのです。いや、それが良いのです。私共は、どんな所であっても、自分が選んだとしても、その道を神様が自分に備えてくださった道として受け止めます。そして、そこにおいて神様が良しとされることを精一杯為していくだけです。それが、神様に造られ、愛され、神様に召し出された者として、御国に向かって歩む私共のありようだからです。結果は分かりません。いや、人間の評価としては結果は分からないと言うべきでしょう。でも、神様の眼差しの中ではもうとっくに結果は分かっています。「良し。よくやった。」です。それ以外ありません。そして、この神様の評価こそが本当に意味のあることなのです。簡単に言えば、盗んでも、人をだましても富を手に入れさえすれば良いのか？良いはずがありません。神様は必ず裁かれるからです。

10 節に「ロトが目を見て眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、……主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。」とあり、14 節には「主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。『さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。』」つまり、ロトは自分の目で見て判断した。これは、まさに人間の見えるところを見て、判断したということでしょう。一方アブラムは神様によって目を上げるように促されて見渡した。これは神様によって目を上げさせられた、つまり信仰の眼差しによって見せられたということです。私共はこの信仰の眼差しによる判断、信仰の眼差しによって与えられる希望、これをもって生きていく。それがキリスト者です。イエス様が十字架にかかり、三日目に復活されたイエス様が「私に従いなさい」と招いてくださっているわけです。ですから、私共はこのイエス様の招きを受けて、これが私のイエス様にお従いする道とおかれている場を受け止めて、御国を目指して健やかに歩んでいきたいと心から願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

私共はアブラハムと同じ神の民として生かされています。本当に信頼すべきお方は、ただあなた様だけです。私共は明日を知りませんが、あなた様は全てをご存じです。そして、私共に「我が子よ、見なさい。そして、行きなさい」と告げられます。信仰の眼差しをもって、私共に備えられているあなた様の恵みの明日を仰ぎ、為すべき事を為してまいりたく思います。どうぞ、私共に信仰を与え、御言葉をもって導き、出来事をもって支えてください。この世の富に惑わされることがありませんように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン